

哲学と二つの言語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 真木 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7115

哲学と二つの言語

清水 真木

哲学の意味をめぐる通俗的な理解

日本語の「哲学」という名詞、そして、明治以降、「哲学」という言葉によって日本語に置き換えられてきた西洋近代各国語の語彙に含まれる *philosophy*、*philosophie* などの言葉が使われる文脈は、大きく二つに分かたれる。すなわち、一方において、「哲学」は、専門的な学問分野としての哲学を指し示すために使用される。しかし、他方において、「哲学」という言葉が、通俗的な意味を担う場面もまた、少なくはない。たとえば、「あの人には哲学がない」「松下幸之助の経営哲学」などの表現に含まれる「哲学」という言葉は、哲学史を構成する哲学、つまり、学問としての哲学、あるいは学問的であることを目指す活動としての哲学を意味するものではない。これは、通俗的な意味における哲学を指し示すものであり、このような用法に従うなら、哲学というものは、具体的な経験によって修正されることのもっとも少ない信念の束として理解することができる。言葉の通俗的な意味における哲学とは、これを修正しなければならぬ場合、修正の影響が人生の全領域に及んでしまうような一群の信念、あるいはこれを記述する言語である。クワイ

ンの言葉を借りるなら、修正のコストのもっとも大きな信念、信念体系の中心に位置を占めるような根本的な信念を指すものであるに違いない。

そして、「哲学」は、このような意味で用いられるかぎり、厳密な定義を必要とすることはない。なぜなら、通俗的な意味における哲学は、哲学以外のものから区別されねばならないわけではなく、また、自らの存在論的な身分を明らかにすることも必要ではないからである。「哲学」とは、一群の知的な活動に便宜的に与えられている名前にすぎない。クワインは、ある短い文章の中で、「哲学」(philosophy)というのは、単なる「四音節の語」(a four-syllable word)であり、哲学という言葉の用法を歴史的に辿る試みは、「四音節語の変動的意味論」(migratory semantics of a tetrasyllable)と呼ぶことができるようなものしかにならな⁽¹⁾いと語っている。通俗的な意味における哲学の場合、たしかにその通りであろう。

学問の定義

これに対し、哲学史上に位置を占める哲学者の多くは、少なくともアリストテレスからフッサール⁽²⁾まで、自らが携わる活動を学問として、あるいは少なくとも学問的であることを目指すものとして理解してきた。哲学史が記述する哲学とは、自らに学問的であることを使命として課すような哲学であり、この点において、通俗的な意味で「哲学」と呼ばれているものからは区別されねばならない。

「哲学者」を意味するギリシア語の *philosophos* という言葉、そして、「哲学」を意味する *philosophia* という名詞のもっとも古い用例は、紀元前五世紀の文献に遡ることができる⁽⁴⁾。そして、これらの言葉が使われるようになってから一

八世紀まで、日本語の「哲学」に対応する西欧各国語の名詞はいずれも、「学問」の同義語として用いられてきた。つまり、西欧世界では、ながいあいだ、哲学が学問と見做されてきたばかりではなく、学問の方もまた、「哲学」の名のもとに遂行されてきたのである。

とはいえ、これから述べるように、哲学がどのような知的活動であるとしても、哲学は、「哲学」と呼ばれるかぎりにおいて、一つの奇妙な運命を背負うことを余儀なくされている。哲学に特徴を与えているものは、哲学と「哲学とは何か」という問のあいだに見出される特殊な関係である。「哲学とは何か」という問は、哲学と不可分のものであり、「哲学とは何か」という問と哲学とのあいだに見出される関係は、たとえば、「物理学とは何か」という問と物理学とのあいだの関係とはまったく異なるものとして理解されねばならぬ。

物理学が「物理学」の名に値するものであるためには、物理学は、他の学問から区別されていることが必要であり、しかも、物理学的な探究に携わる者たちは、対象、目標、方法、観点、基本的な術語の意味などについて、理解をあらかじめ共有していなければならぬ。「物理学とは何か」という点に関し、探究に携わる者たちのあいだで意見が一致していなければ、探究の成果が蓄積されることはなく、学問の進歩というものもまた不可能であるに違いない。というのも、ある研究者にとっては何らかの成果として理解すべきものが、この研究者とは異なる観点から同じような探究に携わっているほかの者には、無意味であったり、異なる文脈の内部に置き換えられ、誤解されてしまったりするかも知れないからである。

学問の歴史では、一つの対象に関し、これを探究するときに前提とすべき認識論的な枠組が全面的に変化することがある。「科学革命」に代表されるこのような枠組の転換の時代には、一つの同じ対象が、いくつもの異なる前提にもとづいて探究されることが少なくない。フーコーの指摘をまっまでもなく、一六世紀までの学問の多くは、当時、世界の

常識的な見方として通用していた「ミクロコスモス」と「マクロコスモス」の照応関係を前提とするものであった。たとえば、一六世紀まで、ある植物のつける実は、眼の病気に効果があると信じられていた。もちろん、この実が眼病治療に効果があると期待されていたのは、何らかの化学的な成分がこの実に含まれており、これが分析によって確認されたからではなく、この実の形が眼の形に似ているからにすぎない。自然界には、人間の臓器に形の似たものが必ずあり、ある臓器が病に罹ったときには、この臓器に形の似ているものを薬として服用することによって病から恢復する。…、形が眼に似ている植物の実は、眼病の治療に効果があるという主張は、「ミクロコスモス」としての人間と「マクロコスモス」としての自然の照応を認める自然観を前提とするものであり、この照応関係を前提としなければ、受け入れることのできぬもの、単なるナンセンスになってしまうであろう。^⑤

また、「精神分析学」と呼ばれる学問では、フロイト以後、精神分析に携わる者たちの集団が、アドラー、ユング、ラカンなどを中心とするいくつもの小さなグループに分裂した。そして、このことが原因で、「精神分析学とは何か」という問に対する共通の答は失われ、精神分析学は、複数の相容れない定義を与えられることになった。^⑥ 精神分析学を外部から見るとき、この学問は、曖昧な輪廓しか具えていないように見える。「精神分析学」の名のもとに遂行されている活動が、精神分析の意味をめぐる共通の理解を前提とするものではなく、ただ「精神分析学」という共通の名のみが、いくつもの活動を架橋しているにすぎないからである。

しかしながら、物理学にとり、「物理学とは何か」という問に対する答は、物理学に含まれるすべての探究が開始される前に、あらかじめ何らかの形で与えられていなければならないものである。また、物理学者たちが、物理学の意味をめぐり、何らかの合意を目指して討議することがあるとしても、討議の内容は、それ自体としては物理学的な探究ではない。したがって、討議の結果として得られた合意もまた、物理学的な探究の成果ではない。「物理学とは何か」に

関する討議は、物理学ではないのである。

「闘技場」としての哲学

精神分析学の場合と同じように、哲学に携わる者、つまり哲学者たちもまた、「哲学とは何か」という問に対する一つの同じ答を共有しているわけではない。すなわち、哲学の歴史を、時間の経過とともに探究の成果が共有され、蓄積されるプロセスと見做すことはできないことになる。カントは、学問の進歩が成果にもとづいて測定されるものであり、目的との関係において前進に支障をきたしたり、退却や方針転換を余儀なくされたり、探究の意図に関し研究者のあいだで見解が一致しないようなとき、このような学問は進歩しているのではなく、「単なる暗中摸索」(ein blosses Heruntappen)の状態にすぎないと考える。そして、カントによれば、数学や論理学が、その誕生以来、直線的な進歩を経験し、カントの少し前の時代に自然科学がこの進歩の軌道をようやく歩み始めたのに対し、「形而上学」(Metaphysik)つまり狭い意味における哲学は、このような進歩とは無縁のものである。『純粹理性批判』B版序文には、次のような一節が見出される。

…運命は、形而上学にあまり好意的ではなく、形而上学は、学の確実な歩みを進めることができなかった。…形而上学では、何度も道を引き返さざるをえない。というのも、行こうと思つているところに道が通じていないことがわかるからである。そして、形而上学の信奉者たちが主張において全員の同意を得ることに關しては、形而上学はこのようないふからまだ非常にかげ離れているため、形而上学は、むしろ、まったく本来的には自らの力を闘いに

おいて行使すべく定められているように見える一つの闘技場である。すなわち、この闘技場の上には、どの闘技者もまだ決してどんなにわずかな陣地をも勝ち取ることができなかったのであり、また自らの勝利を持続的に所有し続けることができなかったのである。それゆえ、形而上学の手続きがこれまでは単なる暗中摸索であり、非常に悪いことに単なる概念のもとにあったということには、いかなる疑いもない。⁹⁾

カントの比喩が妥当なものであるなら、哲学の歴史は、「闘技場」(Kampfplatz) のようなものであることになる。哲学は、誕生から経過した時間のながいのに反し、すべての哲学者が共有すべき成果、すべての哲学者が前提とすることのできるような洞察を一つも産み出してはこなかった。学問の進歩が、事柄の真相をめぐる探究の成果の蓄積によって測定されるべきものであるとするなら、哲学は、約二六〇〇年のあいだ、一ミリの進歩も前進も経験することがなかったことになる。このかぎりにおいて、哲学は、不毛な知的活動であると見做されねばならない。哲学史は、普通の学問が時間の経過の中で作り上げて行くような「進歩」とは無縁の歴史である。

マックス・ヴェーバーが指摘するように、普通の学問に携わる者は、自らの探究の成果が、学問の進歩によって乗り越えられて行くことを覚悟して、探究に従事しなければならない。¹⁰⁾ 学問を遂行することは、いつか乗り越えられ、歴史的な役割を終え、忘れられてしまうという予想のもとに遂行されるものである。しかし、哲学は、普通の学問とは異なり、進歩とは無縁である。したがって、哲学者には、ヴェーバーが想定していたような悲哀も覚悟も不要であることになる。

そして、哲学が普通の意味における進歩と無縁であるという事実は、哲学と哲学史との関係が、たとえば物理学と物理学史のあいだの関係とは性格を異にするものであることを予想させる。物理学の場合、物理学の歴史についての知識

が物理学の探究を促進することはない。物理学にとり、物理学史は外的なものであり、物理学史に関する知識の有無は、物理学の遂行に影響を与えることはない。たとえば、約四〇〇年前、ガリレオの時代に「自然学」(Physica)のの名のもとに遂行されていた学問の具体的な内容は、学問の進歩によって乗り越えられ、現代では、歴史的な使命を終えているからである。

これに対し、哲学には進歩がない以上、過去の時代の哲学が乗り越えられることはなく、哲学者の言葉が歴史的な役割を終えるということもない。哲学史に一度姿を現した哲学者の言葉は、これを読む者がいるかぎり、過去の哲学であると同時に、現在の哲学でもある。二四〇〇年近く前に生れたプラトンの著作群が、一点も失われることなく全体として現在まで伝わっているという事実は、哲学というものが乗り越えられることのないものであることを雄弁に物語る。哲学史について知ることは、哲学を促進するばかりではなく、大抵の場合、哲学を遂行するための不可欠の前提として理解されているのであり、ときには、のちに述べるヘーゲルやガダマーの場合のように、哲学史と哲学は一体のものであるとすら考えられているのである。「ヨーロッパ哲学の伝統についてのもっとも確実で一般的な特性描写は、それがプラトンについての一連の脚註から成り立っていることである」^①。ホワイトヘッドのこの言葉は、哲学が本質的な部分に関し、時間の規定を欠いたものとして理解可能であることを雄弁に物語っている。

定義なき学問

哲学には、哲学者が吟味することなく共有し前提とすることが許されているようなものは何もない。そして、カントが「闘技場」と表現した哲学と哲学史の状態を作り出した原因の第一のものは、「哲学とは何か」という点に関し哲学

者たちの見解が一致しないという事実に求められねばならないように思われる。哲学の意味が明らかではない以上、さしあたり、哲学を哲学ではないものから区別する標識に関し、哲学者たちの意見が一致することはないことになる。さらに、類としての哲学がどのような種を持つのかということ、言い換えるなら、哲学の区分に関してもまた、哲学者たちのあいだに合意が見出されることはない。たとえば、*ontologia* というラテン語の形で一七世紀に初めて姿を現した^⑬「存在論」という言葉が復権させて自らの探究を指し示すために使ったハイデガーは、哲学とは形而上学であり、形而上学とは「存在論」(*Ontologie*)にほかならないことを、繰り返し主張する^⑭。ハイデガーによれば、哲学とは本質的に「存在論」、つまり、「存在者」を存在させる「存在」の意味を問う作業であることになる。たしかに、哲学の意味をめぐるハイデガーのこのような理解は、哲学史の内部に何人も先駆者を持っており、また、ハイデガー以後の多くの哲学者によって支持されているように見える^⑮。

けれども、哲学史の内部には、新カント主義のように、哲学の本質を形而上学や存在論とは異なる点に求めねばならないという主張もまた見出される。むしろ、歴史的に見るなら、存在論や形而上学をめぐるハイデガーの評価は、新カント主義の反形而上学的な傾向への反動という側面を持っている。さらに、形而上学や存在論は、哲学の本質的な部分ではないばかりではなく、ハイデガーの理解する意味における存在論は、哲学の一部ですらないと主張する哲学者もまた、決して少なくはないのである^⑯。

哲学の意味をめぐる見解が多様であるという事実に関連し、ヘーゲルは、『哲学史講義』の冒頭において、何らかの「対象」についての歴史が、この「対象」の理解の差異に応じて変化すること、特に哲学の場合には、他の対象とは異なり、「哲学とは何か」をめぐる見解があまりにも多様であり、そのため、哲学史の姿として思い描くものもまた、人によって区々になってしまおうと語っている。ヘーゲルによれば、これは、他の学問と比較したときに、哲学の「短所」

(Nachteil)と表現されねばならないものである。ヘーゲルは次のように言う。

…哲学の概念について、つまり、哲学が何をなすべきであり、何をなすことができるのかということについて、さまざまな見解が姿を現す。歴史の対象についてのこの第一の前提、意見が固定したものではないとするなら、歴史そのものが何かグラグラしたものにならざるをえないのであり、特定の意見を前提とするなら、歴史は一貫性を維持するであろうが、その場合には、この歴史は、対象についての異なる意見と比較されて、一面的であるという非難を受けるのをどうすることもできない。¹⁶⁾

ヘーゲルによれば、すべての哲学史は、したがって、哲学の意味をめぐるすべての主張は「一面性」(Einsseitigkeit)を避けることができない。「哲学とは何か」という問に対する答は、時間の経過とともに一つに収束して行くものではないことになる。しかし、それにもかかわらず、哲学が学問的であることを目指す知的活動でなければならぬとするなら、「哲学」に定義が与えられないかぎり、哲学は、自らの端緒に辿りつくことすらできない。そして、哲学が端緒にすら到達していないとするなら、哲学は、「終焉」¹⁷⁾の瞬間を欠いているばかりではなく、いまだに哲学を開始した者すらなく、哲学史なるものを構成することもまた不可能であることになってしまふ。

自己言及としての哲学

とはいえ、「哲学」を定義する試みと哲学とのあいだには、他の学問には見出すことのできない、ある特殊な関係が

認められる。

物理学の意味が物理学的に明らかにされねばならぬものではなく、精神分析学には精神分析学の意味を問うことができない。これに反し、哲学は、権利上、「哲学とは何か」という問に自ら答えることを禁じられているわけではない。なぜなら、哲学の意味が明らかにならぬかぎり、哲学が主題的に取り上げられることを許されている問題を、哲学が問うことを禁じられている問題から区別することはできないからである。さしあたり、哲学というのは、名称のほかには何も決まっていない空虚な知的活動であり、哲学者にとり、どのような方法を、どのような観点から、どのような意図のもとで取り上げることも自由である。哲学者の語る言葉には、対象、方法、観点、意図などに関し、守らなければならぬ規則、逸脱すれば「哲学」の名にふさわしくないものと見做されてしまうような基準などない。当然、「哲学とは何か」という問に対し答を与える試みを哲学と認めるのを妨げるものもまた、何もないのである。

哲学の意味に関するかぎり、哲学者のあいだには、いかなる合意も見出すことはできない。しかしながら、哲学の意味をめぐる合意が欠けているにもかかわらず、否、合意が欠けているにもかかわらず、まさに、合意が欠けているからこそ、哲学者には、「哲学とは何か」という問に答える試みを哲学に属するものとして取り上げることが許される。どのような活動が「哲学」の名にふさわしいものであるのか、この問題を解決する作業は、それ自体、「哲学」の名にふさわしいものであることになる。むしろ、形式的に考えるなら、この作業は、そして、この作業だけは、哲学に属するただ一つの固有の課題であると考えることが可能なものなのである。

哲学は、「哲学とは何か」という問に自ら答えることができる。また、この問に答える試みを、哲学は、自らの最初の問題として引き受けざるをえない。この問に対し答が与えられないかぎり、哲学に属すると普通には考えられている多くの問題が、哲学のものであると認められないからである。哲学とは何かという問に答を与える試みは、それ自体、

「哲学」と名づけることが可能である。

ヘーゲルの場合、このような課題を引き受けることは、必ずしも困難ではない。というのも、ヘーゲルは、哲学史の弁証法運動を哲学の弁証法運動と重ね合わせることににより、哲学史の記述、体系としての哲学の記述、哲学を規定するという三つの作業を同一のものとして理解するからである。哲学史を全体として記述することにより、哲学が体系として記述され、それとともに、哲学の意味もまた明らかになる、ヘーゲルはこのように考えている。「哲学とは何か」というのは、ヘーゲルの場合、哲学の最初の間であるとともに、最後の間でもあることになる⁽¹⁸⁾。

そして、ヘーゲルのこの理解に従うかぎり、哲学史のそれぞれの部分を構成する哲学者の言葉は、たしかに歴史的な制約を受けているけれども、哲学史全体を可能的に含むものでなければならない。「哲学史上のどの哲学も必然的なものであったし、今なお必然的なものであり、したがって、どれ一つとして没落することなく、すべてが一全体の要素として哲学のうちに保存されている」のである⁽¹⁹⁾。『哲学史講義』には、次のような一節が見出される。

ここでさらに思い出されるべきもう一つのこととは、事柄の本性のうちにある次の点を言うのに、警戒をする必要はないということである。すなわち、**もっとも新しい哲学のうちで把握され、そこに表されているような理念**というものが、**もっとも発展した、もっとも豊かな、もっとも深い理念**であるという点である⁽²⁰⁾。

しかしながら、「哲学とは何か」という問をめぐる哲学者たちの見解と同じように、哲学史とは何であり、哲学史において現代がどのような位置を占めているのかという問題についてもまた、ヘーゲルとは異なるいくつもの主張を認めることができる。ヘーゲル以前には、哲学史を直線的な発展の歴史として理解する哲学史観がカントによって表現を与

えられている。ヘーゲル以後には、ディルタイやガタマーなどによって書き遺されたもののうちに、哲学は、時間の経過とともに、進歩を経験するのではなく、表面的な変化にすぎず、すべての哲学は共通の真理を異なる仕方で見現するものにすぎないという見解が姿を現す。哲学史のうちに弁証法運動が見出されるということもまた、それ自体、哲学の意味をめぐる一面的な見方にすぎないと考えねばならない。「哲学とは何か」という問に対する答と哲学との関係をめぐるヘーゲルの見解もまた、誰もが同意しうるものではなく、それ自体、解決されるべき問題の表現であるに違いない。

メタ言語としての対象言語

「哲学とは何か」。この問には、すべての哲学者が同意するような、ただ一つの答というものが欠けている。したがって、哲学を哲学ではないものから区別する標識についてもまた、哲学者たちの意見は一致していない。哲学に固有のものは、対象であるのか、方法であるのか、観点であるのか、目標であるのか、私たちに、確実なことは何もわかっていない。確かなことがあるとすれば、それは、哲学の意味が明らかではない以上、①哲学が開始されるためには、「哲学とは何か」という問が問われねばならないこと、そして、②哲学に許されないことは何もなく、したがって、哲学は自らの意味を問うことを自らの最初の課題として引き受けることが可能であり、また、引き受けざるをえないということである。

さしあたり、「哲学とは何か」という問に対して与えられているのは、「哲学がそれであるところのものである」という空虚な答にすぎないかも知れない。しかしながら、この問に対し万人が同意することのできるような答が与えられるとすれば、そのとき、哲学の意味が明らかになる以前の哲学の歴史は、全体として一挙に乗り越えられ、哲学と哲学史

は、物理学と物理学の歴史のように、たがいに外的なものとなるのであろう。

「哲学とは何か」という問に答を与えることは、哲学に課せられた最低限の課題であり、おそらく、哲学以外の学問が代わりに引き受けることのできぬ唯一の課題であるに違いない。もちろん、哲学の意味を哲学の外部から、たとえば、社会学や心理学の観点から明らかにすることは不可能ではないに違いない。実際、一九世紀後半以降、哲学に固有の問題として伝統的に認められてきた問題を、社会的、心理学的な観点から解決する試みが姿を現す。しかし、このような試みは、「還元主義」であり、自己矛盾を含む無効なものと考えられ、繰り返し斥けられてきた。

したがって、「哲学」の名を与えられた活動のうち、哲学に属するかどうか疑わしい部分を切り捨てて行くと、最後には、哲学の意味を明らかにする作業だけが哲学に残されることになる。「哲学とは何か」という問を問い、これに答えることは、哲学のミニマムの姿、「哲学の零度」なのである。

哲学が哲学であるかぎり、避けて通ることのできぬものは、「哲学とは何か」という問に答える作業である。哲学は、この問に対し、つねに何らかの態度をとるものでなければならぬ。言い換えるなら、「哲学的」と表現することができるといふ言説はすべて、哲学の意味を明らかにする作業の一部として、「哲学とは何か」という問に対する間接的な答として理解することができるものでなければならぬことになる。

ところで、一九三〇年代に、タルスキによって形式言語に関する「対象言語」と「メタ言語」の区分が導入されて以来、現在にいたるまで、自然言語もまた、「対象言語」と「メタ言語」へと相対的に区分することが可能であると一般には考えられている。たしかに、たとえば物理学の場合、自然現象を記述するとき用いられる言語は、自然現象を記述するとき用いられる言語について語る言語から明瞭に区別されている。そして、「物理学」の名を与えられるのは、前者の言語が表現する内容だけである。

学問においてメタ言語と対象言語が区別されるという事実は、学問が、限定された探究の対象と方法、使用する術語などを持っており、対象や方法や術語の意味に關し、研究者たちのあいだであらかじめ合意が形成されているという事実と並行的なものとして理解されねばならない。すなわち、対象言語が特定の方法を用いて特定の対象を記述する言語であるのに対し、探究の結果を記述する言語を記述する言語は、メタ言語に相当する。右に挙げた物理学の例が示すように、普通の学問のもとで学問の範囲が対象言語の内容に限定されているのは、メタ言語の記述するものが、物理学の場合、「重力」「気体」「電気」「運動」などの意味であり、これらが物理学以前の問題であると考えられているからである。

ところが、哲学は、哲学以前の問題というものを欠いている。「哲学とは何か」という問に答えることは、それ自体として哲学の課題であり、探究の遂行以前にあらかじめ定められている固有の対象や方法などを見出すことはできない。哲学には、決った対象も方法も欠けているのである。

決った対象や方法が欠けている以上、哲学的な言説の内部には、他の学問の場合とは異なり、対象言語とメタ言語の区別を見出すことができないことになる。「哲学」の名のもとに探究され、語られることはすべて、何らかの対象を持っているかぎりにおいて対象言語である。それとともに、「哲学」という言葉の意味が明らかではない以上、哲学的な言説はすべて、自らが哲学的な言説にふさわしいことを説明するという機能を担うものでもなくてはならない。つまり、「哲学とは何か」という問への間接的な答であるかぎりにおいて、哲学的な言説は、「哲学」についての言説として、つまり、メタ言語として理解されねばならないのであり、対象言語は、対象言語のままにとどまることは許されず、つねにメタ言語として理解する余地を残していなければならないのである。

とはいえ、哲学的言説、特に一九世紀末から二〇世紀初めに現れた何人かの哲学者たちの著作では、対象言語とメタ

言語が明瞭に区別されているように見えるものがある。⁽²³⁾たとえば、オイゲン・フィンクは、「フッサールの現象学における操作的概念」という表題を持つ文章において、フッサールが主題化せず、慎重に吟味することもないまま使用しているように見えるいくつかの概念を取り上げ、フッサールが注意を向けていた「主題的概念」から区別し、これを「操作的概念」と名づける。フィンクによれば、操作的概念とは、表面的には「吟味されていない」ように見える概念、反省されることなく記述の中に持ち込まれているように見える「知的図式」であり、「哲学する思考」によって「使いこなされている」ものである。もちろん、この操作的概念は、忘れられているのではなく、反対に、哲学者の「関心そのもの」として理解されねばならない。⁽²⁴⁾そして、フィンクは、フッサールについて次のように言う。

主題的概念と操作的概念とのあいだに働く緊張は、人間の哲学の不安定性に帰するものであり、この不安定さが自分自身の影を飛び越えようとして、自分自身の方法論を企てたり、必然的な「理解の循環」とか「思弁的命題」とか、物ではない存在の、何度でも撤回されうるような物化とか、世界全体に対する世界内部的カテゴリーの不適切性などについて語ったりするのだとしたら、こうしたことは、特別な形でフッサールの現象学についても該当することなのである。⁽²⁵⁾

フィンクによれば、フッサールの現象学は、吟味せずに受け入れている図式や前提のために批判されることが少なくない。つまり、フッサールの現象学では、対象と方法、対象言語とメタ言語が明瞭に区別されていると普通には考えられているのである。しかし、実際には、フッサールのもとでは、操作的なものと主題的なものは対立せず、操作的概念すら、「影の形成からその外へと連れ出される」とフィンクは言う。⁽²⁶⁾つまり、フッサールは、たしかに、主題的な概念

と操作的な概念を区別しているけれども、操作的概念が主題的に取り上げられないわけではなく、反対に、操作的概念もまた、適切な形で主題化されていることになる。⁽²⁾

もちろん、フイंकに従うなら、哲学において、すべてを主題化することは不可能である。もし、すべてが主題化され、「影」の部分が失われれば、知は完結し、「思考のすべての歴史は終わってしまう」ことになる。⁽³⁾ 当然、哲学もまたその役割を終えることになる。

ロラン・バルトは、ある短い文章の中で、二〇世紀の文学が、自分自身について語るようになり、文学が文学であるとともに、「メタ文学」、つまり、文学についての文学になったと語っている。バルトによれば、文学は、文学についての文学になり、文学の言語は、フローベール以来、対象言語であるとともにメタ言語でもあるという二重の性格を具えるようになったことになる。バルトは言う。

文学は、自分自身について考察することは決してなかったし、眺めると同時に眺められる対象に自分を分割することも決してなかった。要するに、文学は、語りはしたが、自らに語りかけることはなかったのだ。それから、正しいのは自分だというブルジョワの意識が初めて動揺し始めるとともに、文学はみずからの二重性を感じ始めた、文学は同時に対象であり対象へのまなざしでもある、言葉であり言葉についての言葉でもある、対象としての文学でありメタ文学、つまり文学についての文学でもあるといった具合だ。⁽⁴⁾

しかしながら、バルトが二〇世紀の文学について指摘しているこのような特徴を、哲学は、自らの歴史的な誕生の瞬間以来、現代にいたるまで保持している。哲学の場合、対象言語とメタ言語は決して截然と区分されることはなく、反対に、両者はつねに混じりあう。

哲学は、外部世界の中立的な記述という役割を具えているとともに、外部世界を記述する哲学自身の記述でもある。鏡を正面から描くとき、そこには、鏡に映し出された私もまた描かれていなければならない。これと同じように、哲学が世界を記述するときは、記述された世界の中には、哲学自らもまた記述されていなければならないのである。

註

- (1) Quine, Willard van Orman, "Has Philosophy Lost Contact with People?", in: *Theories and Things*, Cambridge, Massachusetts, The Belknap Press of Harvard University Press, 1981, p. 190f.
- (2) eg. Aristoteles, *Aristotelis Metaphysica*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit Werner Jaeger, Oxford, 1973, 981a3.
- (3) eg. Husserl, Edmund, *Gesammelte Schriften, Band 5: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, herausgegeben von Elisabeth Ströker, Hamburg, Felix Meiner, 1992, S.148ff.
- (4) Kranz, Margarita, „Philosophie“, in: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, herausgegeben von Joachim Ritter und Karlfried Gründer, Band 7: P-Q, Basel, Schwabe, 1989, S.574.
- (5) Foucault, Michel, *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, p. 41ff.
- (6) シブリン・ト・ポレンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、一九七七年、二六九頁を参照のこと。
- (7) Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*, herausgegeben von Raimund Schmidt, Hamburg, Felix Meiner, 1956, BVII.
- (8) Kant, *ibid.*, BII-XIII.
- (9) Kant, *ibid.*, BXIVf.

ず、『人間のすべての判断は、社会的な要因に還元することができる』という主張は社会的な要因に還元することができる」という主張もまた、社会的な要因に還元され、無限後退が発生するからである。

- (23) 対象言語とメタ言語を区別する意図がもつとも明瞭に確認できるのは、ベルクソンの著作であるように思われる。少なくとも、ベルクソンは、自らがその都度どのようなタイプの言語を使用しているのかをつねに考慮しているように見える。しかし、たとえば、『意識の直接的な与件に関する試論』や『物質と記憶』では、二つのタイプの言語が重なり合っているように思われる記述があり、このような記述がどのような存在論的な身分を持つかを明らかにすることは、哲学史におけるベルクソンの位置を確定するために避けて通ることのできない課題であるように思われる。しかし、この問題の検討は、別の機会に譲る。

- (24) Fink, Eugen, „Operative Begriffe in Husserls Phänomenologie“, in: *Nähe und Distanz. Phänomenologische Vorträge und Aufsätze*, herausgegeben von Franz Anton Schwarz, Freiburg, Karl Alber, 1975, S.185ff.

- (25) Fink, *ibid.*, S.190.

- (26) Fink, *ibid.*, S.193.

- (27) Fink, *ibid.*, S.193ff.

- (28) Fink, *ibid.*

- (29) Barthes, Roland, *Essais critiques*, Seuil, 1964, p. 110.

(しみず・まき 商学部准教授)